

動物病院開業31年間の思い出

能代谷光俊†（取手犬猫病院院長・茨城県獣医師会会員）

昭和49年3月、日本獣医畜産大学卒業後、東京の動物病院に4年間勤務した後、私は、見ず知らずの地である茨城県取手市で開業した。北海道生まれの東京育ちで開業するまで両親とともに暮らしており、父は貴重な青春時代を何年間も戦争で費やした頑固な人で、長男である私が出た他の地で開業すると言うと大反対をされたことを思い出す。取手市は雄大な利根川を挟んで千葉県と接し、その昔水戸街道の宿場町として栄えていたところである。私が開業した当時犬猫専門の動物病院は市内のみならず周辺の町村にもなく、産業動物を診療する傍ら小動物診療を行う動物病院が2カ所のみで、混合ワクチンを行う人も少なく毎年ジステンパーで亡くなる犬、3夏越せばフィラリアで腹水、そして下痢で来診すれば80%が腸内寄生虫という状況であった。飼い犬のほとんどが雑種犬であり、雑種は病気にかからないという風習が色濃く残っていた。ある年には市内を流れている小貝川の下流から上流に沿ってかなり広範囲でジステンパーが流行し、多くの犬が死亡した。今では実際にこの病気を診察したことがない若い獣医師もかなりいるものと思われるが、私もここ10年以上遭遇していない。フィラリア症もまた然り、あれほど秋の終わりから春先にかけて多かった大静脈症候群（VCS）も3年前に久しぶりに手術して以来全く無く、マイクロフィラリアすら見ることがなくなった。20年前は多い時、週に5頭ものVCSの手術をしていたことを毎年フィラリアの予防季節が来ると思い出す。当時私の病院に勤務していた動物看護師は、犬が待合室に入って来るやいなや診察室に来て、もちろん私が聴診する前に、Vの字に指を二本立て知らせてくれたものである。長年見ていると顔の表情でわかるそうだ。開業当初は今のよう血液生化学検査が容易にできず、まして人の臨床検査センターで動物の検査など行ってはくれなかった。友人の紹介で都内の病院に勤務していた臨床検査技師（女性）と知り合い血液検

査を依頼し、たまにお礼にと思い食事に誘っていたところ、勘違いされ数年後に大変な請求書が来た苦い思い出もある。

現在は往診を依頼されることはほとんどなくなったが、以前はよく診療に伺ったものである。農家に行くと必ず、夏は特に診察後冷えたビールがでてきた。仕事なのでアルコールはお断りし、お茶と手作りの惣菜・漬物などつまみながら世間話が始まる。都会と違いのどこでのんびりと時間が流れていたような気がする。治療費の代わりに旬の野菜を貰ってきたこともあった。おかげさまで今でも新米の時期になるとあちこちからいただきお米を買うことは殆んどない。当動物病院の目の前の道路を挟んだ高台に競輪場があり、以前は開催日になると車券を買う人で大変混雑し、帰りにお金を全部すった人が電車賃を借りにきたこともあった。またあるときは、中年のおじさんが胸を押さえながら苦しそうに「ニトロ、ニトロ」と言いながら入ってきたので、自分の診察を中断して男性を病院まで運んだ事もある。狭心症の発作で苦しく看板の下の「病院」の文字だけしか見えなかったのだろう。

開業して30数年我が獣医師人生、楽しいことうれしいこと辛く悲しいこといろいろ経験してきたが過ぎてみればすべて思い出。子供たちが巣立った今、自分の今後の人生を考える時期がそこまで来ているような気がする。

能代谷光俊

—略歴—

1974年3月 日本獣医畜産大学卒業

東京・埼玉において動物病院勤務

1978年12月 茨城県取手市にて開業。現在に至る。



† 連絡責任者：能代谷光俊（取手犬猫病院）

〒302-0024 取手市新町6-17-23 ☎0297-73-1941 FAX 0297-73-7000